

中村元記念館通信 第3号

平成24年10月10日、松江市八束町に誕生した中村元記念館。中村元って誰？ 何をした人？ インド思想って？ ひよっこ学芸員改め、ひよっこ研究員の秋鹿が、わかりやすくをモットーに中村元博士や東洋思想を紹介します！

こうしてみると、この出雲生まれの「流れ者」は、まさに流れるように生きてきたという感が深い。
.....このような道に入ったのは、人々との出会いに、何よりも影響されたからであろう。

(中村元『学問の開拓』2012年 ハーベスト出版)

インド哲学、仏教学研究の世界的権威である中村元博士。その生涯で発表した論文・著作はなんと1500点以上。博士は一体どうやって、これほど膨大な研究活動を可能にしたのか？ 今回は、博士の壮大な研究人生に迫ります！

空襲から原稿を守れ！

時は昭和17年、太平洋戦争の真っ最中。中村元博士は、原稿用紙の入手さえ困難な状況下で、博士論文『初期ヴェーダーンタ哲学史』を書き上げました。恩師・宇井伯寿博士に思わず悲鳴を上げさせたほど膨大な博士論文は、学会から高い評価を受け、活字での出版も決まりましたが、なにしろ戦時中です。出版が可能になるまで、博士は大切な原稿を守らなければなりません。

世田谷に住んでいた博士と妻・洛子夫人は、それから空襲警報が鳴る度に、いくつもの米櫃に詰めた原稿を防空壕へと運ぶ日々。そんな中で洛子夫人が少しずつ原稿を筆写し、その写しを夫人の実家に保管。こうして大切に守られた原稿は、戦後岩波書店から無事刊行され、現在も世界中の研究者に愛読されています。

原稿を失っても、あきらめない。

昭和18年、中村元博士は30歳という異例の若さで、東京帝国大学の助教授に就任しました。それをきっかけに『佛教語大辞典』の執筆に着手し、20年もの歳月をかけて、4万枚の原稿を完成させました。ところが出版社の手違いで原稿を紛失、そのまま見つかることはありませんでした。しかし博士は出版社を一切責めることなく、周囲の人々の励ましを受けて再び人を集め、東方研究会と名付けた編集チームを結成し、もう一度執筆に取り掛かったのです。そして8年後、ついに東京書籍から『佛教語大辞典』が出版されました。この大仕事をやり遂げた博士は、原稿を紛失したおかげで、最初よりもずっといいものできたこと、逆に喜ばれたそうです。研究にかける博士の熱い思いと、博士の深い寛容の精神が表れたエピソードです。

鍵は、あえて掛けない。

中村元博士はなんと、自宅に鍵を掛けない主義だったそうです。鍵を掛けないことと研究活動に一体何の関係が？ 博士曰く、大量の本や資料を抱えて帰宅した際に、呼び鈴を押して鍵を開けてもらうまでの時間

が惜しい。10年に一度入るかどうかわからない泥棒のために、毎日毎日その時間を費やすのは割に合わない、ということです。実際泥棒も入ったことがあったが、置いてあるのは読めない文字の本ばかり、ということで被害はなかったとか。

一方で博士は、届いた手紙にはまめに返事を書き、来客の帰りは必ず玄関まで見送るなど、人に対してはとても丁寧な方だったそうです。時間を極限まで節約し、1分1秒でも多く研究に費やす。しかし、人と人とのつながりは大切に。膨大な著作は、こうした行動の蓄積の上に成り立っていたのですね。

ひとを育てる、ひとをつなげる

このように中村元博士が自身の研究活動に注いだ情熱は並大抵のものではありませんが、博士は自分のことだけではなく、若手研究者の研究活動についても、常に心を砕いていました。優れた研究成果を挙げても、食うにも困る日々……今も昔も、若手研究者達の置かれる状況は、非常に厳しいものです。博士は自分が貧しくとも研究を続けて来られたのは、多くの人々の助けがあったからであるとの思いから、研究者達が互いに助け合える、そんなつながりをつくろうと考えました。そうして、前述の東方研究会を母体として、昭和45年に財団法人東方研究会（現公益財団法人中村元東方研究所）が誕生したのです。その後、東京大学教授退官をきっかけに、さらにこの研究所を母体として、現代の寺子屋ともいえる東方学院が誕生しました。研究者だけでなく、学びたいという意欲を持つ誰もが、東洋思想研究を通してつながることができるようになったのです。数多の肩書きを持ちながら、自身の名刺にはただ「東方学院長」とのみ記した博士。このつながりを、どれほど大切に考えていたかがうかがえます。



東方学院長室にて、不動明王像と。

ほとけさまを表す文字 読めなくてもまったく困らないでも読めるとちょっとカッコイイミステリアスな文字「梵字」

梵字の秘密③

ほんじ「梵字」とは、古代インドのことば「サンスクリット語」を書き記すための文字のこと。

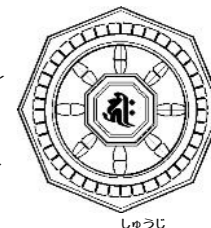
今号の梵字「𑖀」（キリーク）は「阿彌陀如来」の種字。

日本ではとつともなじみ深い、あみださまを表す文字です。

阿彌陀如来の語源である「アミターハ」は「無限の光を放つ者」の意。苦しみに満ちたこの世界を無限の光であまねく照らし、人々を救ってくれる仏さまとして、浄土宗や浄土真宗のご本尊になっています。（ちなみに中村家も代々浄土真宗です）

阿彌陀如来は西方の極楽浄土に住んでいるとされています。

南無阿彌陀仏南無阿彌陀仏……。



サブカル仏教入門③

私の趣味で仏教に関するサブカル作品を紹介していきます。どうか寛容の心でご覧ください。

今回は少年漫画をご紹介します。赤人義一『屍姫』です。あの世から蘇った屍達が人間を喰らう世界。仏教系宗教団体「光言宗」の僧侶達が、無念を抱いて死んだ少女の屍を蘇らせた「屍姫」とともに、この世を死の国に変えようとする屍の王と戦うバトル漫画です。この手の作品で、主人公陣営が仏教団体っていうのはかなりレア。日本で最も身近な宗教であるにもかかわらず、なぜか若年層向けのフィクション作品では、キリスト教や神道や陰陽道に比べて影が薄い仏教。もっともっと少年少女漫画の題材として活用されるべきだと思います。

『屍姫』は仏教だけでなく、世界各地の宗教神話伝説モチーフ満載で、非科学的な内容にちゃんと理屈や法則を与えようとしているところが好印象です。少年漫画なので残念ながらメインキャラはみな剃髪どころか好き勝手な髪をしておりますが、袈裟姿は堪能できます。人類が屍の王に勝利するビジョンが全く見えてこない、絶望的な展開の連続に心が折れそうになりながら楽しんでください。ハードな描写が多いので、高校生以上推奨です。



脇役だけと光言宗大僧正遍照権現様がカッコイイです（赤人義一『屍姫』14巻 2010年 スクウェア・エニックス）

博士の本棚 ③

中村元博士の本を紹介するコーナー

構造倫理講座シリーズⅠ『東洋の倫理』Ⅱ『生きる道の倫理』Ⅲ『生命の倫理』（2005年 春秋社）



「われは万人の友である」……世界をもって我が家とするのである。（『東洋の倫理』）

中村元博士が亡くなられた後、遺稿を元に出版された、アジアニイストな表紙がとっても素敵なシリーズです。人生のあらゆる問題（親子、男女、老若、生死等々）について、インドの原始仏典、中国、日本の仏典を縦横無尽に引用し、解説を加えながら、我々がどう生きべきかを教えてくれます。何百年、何千年も前のインドや中国の人達も、現代と同じことで悩んでいたんだなあとか感できたり、中には当時のとんでもない説話を伝えていたり。

でもすべての仏典の教えを貫く倫理は、このふたつ。「この世に生きるすべてのものを慈しみ、悲れむこと」と「相手を尊敬すること」。仏典は語ります。親は子を「敬親」しなければならないと。夫のつとめとは、妻を「尊敬する」ことだと。仏教が生まれた当時のインド社会は、他の多くの地域と同様に、父親（夫）を一家の頂点とする家父長的性格が強いものでした。そんな時代において、子どもを、妻を、対等な人間として尊敬することを説く、仏教の徹底した平等主義の素晴らしさを感じてください。もちろん、親孝行の重要性や、妻のつとめについてもしっかり書かれていますよ。

中村元記念館通信第3号

発行日
平成25年8月28日

発行所
NPO法人中村元記念館
東洋思想文化研究所

作成者
中野秋鹿（中村元記念館東洋思想文化研究所研究員）

お問い合わせ
〒690-1404
島根県松江市八束町
波入2060 中村元記念館
Tel.0852-76-9593
Fax.0852-76-9693
Mail:info@nakamura-hajime-memorialhall.or.jp
Web:http://www.nakamura-hajime-memorialhall.or.jp/